

## 審査講評

### 北海道赤レンガ建築賞「岩見沢複合駅舎（JR岩見沢駅+有明交流プラザ+有明連絡歩道）」

北海道の鉄道駅舎が、JRグループで全国初の一般公募型建築設計競技（2004年度実施）によって企画・設計が進められた画期的な例である。そして、376点の応募案から選ばれたこの作品が今までに無い、若く澁潤とした魅力に溢れるものとなったことをまず評価したい。また、近年全国に見られる地方都市の中心市街地の衰退を背景に「駅が街づくりの核となるように」という駅舎再建の目的は、駅が地域活性の起爆剤となることにあり、それが実現しつつある点も見逃せない。

岩見沢市は、国策であった石炭産出とその輸送拠点の鉄道の町として北海道開拓の歩みと共に発展を遂げ、駅舎はその要としての役割を果たしてきた。昭和8年に建てられた3代目の駅舎は、牧舎に似たマンサード屋根に特徴のある街の顔として親しまれてきたが、2000年暮れに起きた火災によって残念ながら70年の歴史を閉じた。岩見沢市は、駅舎再建に際して施設が市民交流の場となり街に活気生まれる契機となるように、市民が多く利用する公共施設を合築させる方針を立てた。その方針により、市役所の出張窓口、市民ギャラリー、消費者生活センターといった市民サービス機能の確保ばかりか、福祉ショップ、観光物産センターなどの導入、また大きな駐輪場では冬季の自転車預かりもするなど、多岐にわたる複合的な役割を持つ企画となった。それだけに、再建へのプロセスにおいても市民の関心は高く、駅舎に様々な思いをこめて外壁の煉瓦に名前を刻印するという竣工に向けての試みは、市民はもとより国内外に賛同の輪を広げるなど、鉄道と煉瓦の記憶の濃い街への愛着を加速し、出来上がった施設への市民の思い入れも大きい。

これらのプログラムそのものが、「地域に根ざしたまちづくりの推進を図る（中略）地域社会の発展に貢献する」という赤レンガ建築賞の趣旨に値するものである。

駅舎の建築的な特徴は、基壇となる1層目の煉瓦壁が上部のガラスボックスを支えるという明快な構成で、昼夜を問わず新しい駅舎が街の顔としてその存在感を示している。基壇にはめ込まれたエスカレーターから上がると徐々に雲間から高度を上げるように視界が広がり、駅前広場や近景の街並み、遠景の山々まで見通す開放的な空間に飛び出す。あるいは、駅に列車で到着し、橋上改札の正面で広場と街と山々の景色が出迎える。その空間構成ばかりか構造や設備計画にも、設計者が込めた思いと市民が抱いた駅舎への期待が、分離することなく融合した公共的施設の好例に思える。特に共用部分の豊かなヴォリュームは、厳しい予算の中で獲得した余裕のある空間として評価できる。また、古いレールの窓サッシへの応用や屋根に用いたPC板を直接内部から見せるディテールの工夫、煉瓦を使った光のつづれ織のような新しい表現などを試みながら、求められた複雑な機能を整理し、施工や工期、予算といった厳しい条件の中で、堅実でオリジナルな建築作品としてまとめ上げた設計者の努力に敬意を払う。

設計競技と条件の、橋上改札駅を前提として通学通勤する市民が最も多く利用する1番ホームが駅前広場に接していながら直接のアクセスを求めなかった点や、幅員6m長さ100mという大都会の街路歩道にも勝るようなスケールの跨線自由通路の提案を求めた点は、次世代の評価を待ちたい。

この建築は、賞の趣旨である「建築文化の向上、（中略）創造性豊かな建築、（中略）地域性に配慮し、歴史・風土に調和した美しい景観を創造する社会的ストックに優れたデザイン」である「赤レンガ建築賞」に最も相応しい。

（北海道赤レンガ建築賞審査委員長 大野 仰一）